

□ 生涯学習四つの文脈

日本の高等教育機関がはたすべき新しい役割として、生涯学習がいくつもの文脈で話題になっているが、次の四点に整理できよう。

第一の文脈は、今日の絶えざる技術革新に、青年期の高等教育だけでは十分対応できないので、有職者が自分の専門家としての資質を発展させるために大学で勉強し直すことが必要となる、リカレント教育である。これは主に大学院レベルにおいて、社会人の受け入れの問題として議論されている。

第二の文脈は、十八歳人口が減少するとき、若年層に代って成人が新しいマーケットとなるだろうという、日本の大学・短大の生き残り戦略である。アメリカの大学が十八歳人口の減少期に、成人学生を受け入れることによって学生数を増

加させた事態が、日本でも起こるだろうという予測でもある。

第三は、高等教育機関の本来の役割として教育と研究を同様に地域社会に対するサービスとして生涯学習を考える文脈である。生涯学習の機会を提供することは、大学開放のひとつであるとするアメリカの大学の例が参考にされている。

第四の文脈は、政策的ものである。文部省が生涯学習を重視するようになり、文部省と交渉を持つとうとする大学・短大が実績づくりの手段として生涯学習にとりくむケースである。それまで公開講座などほとんどやったことのない大学・短大が、急に公開講座を開くことが最近になって目立つ現象となっている。

□ 愛短オープンカレッジ

愛知大学短期大学部は、伝統的に公開講座などの大学開放を重視してきたが、

地域社会に対するサービスという立場に立ちながらも、成人学生のマーケットの可能性も追求し、生涯学習のための機関として、英語専修と生活環境からなる別科を設置して、一九八八年四月から開講した。通称は「愛短オープンカレッジ」としている。公開講座などのプログラムを開いている大学・短大は数多いけれども、別科という文部省によって認可された組織の中でそれを行う例は少ない。

無試験で、十八歳以上ならだれでも入学できる学校を短大がつけることは、短大がカルチャーセンターと英会話学校をつくるほどの、発想の転換が必要であった。その転換は、教員が教えてやりたいことを教えてやるという教員本位から、学生が学びたいことを教えるという学習者中心にかえることである。それを達成するのは、大変な課題である。

□ プログラム

授業科目は毎年変更しているが、一九九二年度予定の英語専修のプログラムは、昼間から夜間にわたって春学期と秋学期をあわせて、英会話が初級から上級まで二十一クラス。その他に、ベイシック・イングリッシュ、リスニング、リーディング、口語文法、アメリカはいま、映画の英語、英語でニュース、英語で歌う、チャリーチャプリン、TOEFL講座、実用英検講座、英文ワープロなど十九クラス、全体で四十クラスである。その中で三十クラスがいわゆるネイティブスピーカーであり、ほとんど英語だけで授業を進めている。定員は二十五名に限定している。

生活環境専修の一九九二年度のプログラムは昼間だけで、健康と食生活、中国料理を楽しむ、家族論、社会福祉論、手話を学ぼう、中学生のなやみを考える、消費生活コンサルタント入門、マスコミ

ユニケーション論、女性論、中国語、スケッチ入門、ワープロ実習、パソコン入門、オフィス学入門、日本の古典を読む、自分史の書き方、東三河の水とゴミ、人物でつづる東三河の江戸と明治、生活美学、楽しい小物づくり、初級テニス、等である。英語専修には、安定した数の受講者がいるけれども、生活環境専修は受講者が少ないので、ひとりでも多くの受講者に来てもらおうと、プログラムは毎回苦心して決定している。

□ 受講者

受講者は、一九九一年度の実績で示すと十八歳から八十二歳まで多様な人々を含むパートタイムが主である。パートタイム学生は、希望の科目だけを選択して受講する。愛知大学または短大部の学生で、オープンカレッジで勉強する学生をダブルスクールと呼んでいるが、それが八十三人いる。他に所定の単位を取得し、一年間で修了することを目的とするフル

オープンカレッジ学生数 1991年度

	パート タイム	ダブル	フルタイム	合計
英語専修	136(114)	27(27)	13(10)	176(151)
生活環境専修	65(59)	56(53)	5(5)	126(117)
合計	201(173)	83(80)	18(15)	302(268)

タイムがいる。フルタイムには短大本科に推せて入学できるメリットが与えられている。オープンカレッジの学生は、学内の諸設備の利用やサークル参加など本科と同じ権利を持っている。

() 内は女性

□ 講師

受講者の集まるプログラムを用意するためには、プログラムと同様にそれを担当する講師が重要である。講師は四年制大学、短大部の専任教員が担当するものもあるが、非常勤講師に依存する割合が大きい。それは専任教員の負担をふやせないという面もあるが、英語専修の場合には、いわゆるネイティブスピーカーを確保する目的があり、生活環境専修には、地元の様々な分野で実績のある人を生かしたいというねらいがある。オープンカレッジという場で、様々なネットワークが形成される契機となる可能性は、重要である。しかし、ある分野の専門家が必ずしも有能な講師であるとは限らないので、講師がしは、おもしろいけれど時間のかかる作業である。

□ 成果と問題点

愛短オープンカレッジがスタートした

時は、不安な要素がたくさんあったが、勉強することに熱心な成人の入学者が予想以上にあつて、四年めになって定着しつつあるといえる。本科よりもハイレベルで熱気があつて、楽しい授業がおこなわれているようだ。それは本科の学生にもよい影響を与えている。

受講者どうし、講師と受講者、講師と専任教員の交流も生まれ、いくつかのネットワークが形成されて、市民運動的な広がりもできつつある。

しかし、まだ達成されていない課題も多い。

オープンカレッジを専門に担当する専任教員と専任職員がいないので、運営委員会の負担が大きく、受講者と講師に対するバックアップが十分でない。

業務としても不十分で、やった後で反省することも多い。

新しいことを知らせるには広報・宣伝が重要であり、当初は新聞に大きくとりあげてもらったことが効果的であった。

短大としては思いきつて、ポスター、新聞折りこみ広告をやっているけれど、予算が限られて十分なプレゼンテーションにはなっていない。

当初、重要なパートナーとして考えていた地元の豊橋市の社会教育との協力関係は、広報レベルにとどまっている。

オープンカレッジ運営の問題点としては、本来社会人が最も受講しやすい土曜、日曜や、学校関係者が利用しやすい夏休み、春休みが生かされていない。それは事務体制の弱点に制約されている。

学びたい多様なニーズを満足させる多様なプログラムを用意され、よい講師にめぐまれて、朝から夜まで一年三百六十五日、いつでもだれでも勉強できる体制ができれば、生涯学習は必ず盛んになると信じて運営委員会は努力している。短大の場合は、若い学生よりも成人学生の方が多くなる時代に向かって、愛短オープンカレッジは、出発したばかりである。